

8月16日(日)

こだわりで作る 味の明太子

博多ふくいち

500g

1,280円(税込)

1kg

2,400円(税込)

明太子
切り

お盆には沢山お買い上げありがとうございます。

ふくいちの辛子明太子切り、1kgパックが、めっちゃくちゃ安く入荷しました！正直、値段決めた時、大丈夫かあ？と思いましたが、お客様がよこんで頂けるなら...と思い、今回ドンと1キロ販売。価格は税込2400円!!本場の味をしつかり残した切りタイプなので、サツと使える手軽さがうれしいポイント。ご飯にのせてよし、お茶漬けにしてよし、パスタに絡めても本場に美味しいんです。ちよとマヨネーズを和えたり、アボカドやチーズと合わせたりするのもおすすめです。1キロもあるから家族でシェアしても余裕ですし、一人暮らしの方でも冷凍保存しておけば長く楽しめます。使いたい分だけ取り出して解凍できるので、ストックしておくとも本当に便利です。「明太子好きにはたまらない」そんなお得な機会です。

普段よりかなりお買い得な価格でご用意できましたので、この機会にぜひお試しください。なくなり次第終了となりますので、お早めのご来店お待ちしております。

西田鮮魚店 店長 祐宗 優司



西田鮮魚店

☎72-5246

『庄原土筆短歌会』

鮮コーポレーション(株)

代表取締役会長 西田 昌史



I 歌集『土筆』

悦子が『合同歌集 土筆』という本をいただいてきた。

『庄原土筆短歌会』という会のものだ。

ハワイアンフラの仲間の女性のご主人の歌が載っている。

『庄原土筆短歌会』は、昭和56年に発足して、今年で45年になる。

月1回の学習会。4～5年おきに歌集を出される。

今回で第11集。15人の方が詠まれている。

何人か、わたしの知っている方の名もあった。

歌の内容から察するに、たぶん私と同世代か年上の方たちだろう。

日々の暮らしを切り取る。庄原の情景を描写する。

遙か遠い昔を偲ぶ。子や孫への思いを語る。世情を憂い平和を願う。

時に真摯に、時に達観し、時にユーモアをまじえ。

そして、時に哀惜の念強く。そんな歌が660首。

積み上げられてきた時の重さがここにある。

年を取った？いや、齢を重ねたことの証しなのだろう。

歌集を読んで、そんな思いを強くした。

齢を重ねるのも捨てたもんじゃない、とも。

II 猛暑なり

空蝉は辛夷の下の草むらに猛暑の中で命つながら

猛暑なり庭の辛夷に口あれば暑い暑いとさぞややかまし

目の前の燕の乱舞の華麗さに草刈りの汗いつしか乾き

章雄

猛暑を詠んだ歌が3首。

厳しい環境でも生ききる命の強さとユーモアと爽快感がある。

猛暑を越して酷暑が顔を出し始めた令和。

『酷暑日』気温が40度以上の日をそう呼ぶという。

25度以上が『夏日』30度以上が『真夏日』35度以上が『猛暑日』。

ありがたいことに庄原は酷暑日を経験したことがない。

これまでの最高は2021年の8月5日に記録した38.1度。

38度を超えたのはこの一日だけ。

しかし、遠からず庄原でも酷暑を詠む日がくるだろう。

さらに厳しい環境の夏に、それでもこんな歌が詠めればいいと思う。

III 夫が泳いだ上野池

我が家は上野池の湖畔に立つ。池でも湖畔？

とにかく目の前に上野池が広がる。

一見、涼しそうだ暑が暑い。風が通るわけでもない。海でいえば風。

この夏、築20年を越えた家の修繕をお願いした。

暑い盛り。7月で、おおむね終わったが、たいへんそうだった。

大工仕事は炎天下での作業が大半。

頭にタオルを巻き、ファン付き作業着をまとう。

それでもフーフーと息あらく仕事する大工さん。

私は、クーラーの効いた部屋でテレビの前にいた。

居心地が悪い。良心の呵責といえは大袈裟だが申し訳ない。

せめてもと、外から見えぬようにカーテンをひいた。

風呂の床のタイルも張り直してもらった。

こちらは左官さんの仕事。クーラーが効いている。

「今日は楽だった」と言って帰られたそう。

だが、次はバルコニーの仕事が待っている。

5時になり、片づけをしている大工さんに言った。

「帰ったらビールがうまいねえ」

底が抜けたように呑む彼を知っている。

すると「いやいや、これから畑の草刈りじゃけえ」と。

50代で元気の盛りとはいえ、聞いただけで気が遠くなった。

一日中、クーラーの効いた部屋で過ごす後ろめたさが再び。

「たいへんじゃね」一言のこして、そそくさと家に入った。

小さな声で「74才じゃけえ」とつぶやきながら。

ただ、目の前に上野池のたつぷりの水。

多少なりとも、涼しさを感じさせてくれたのではないか。

そう思ったかった。

その上野池を詠んだこんな歌があった。昔話の世界のようだ。

上野池むかし夫が泳いだよ誰にも何も言われなかったよ

陽子

私たちより10才くらい上の世代は上野池で泳いでいたと聞いた。

わかさが釣れたという時代。水もきれいだったろう。

あのころは真夏日がせいぜいだったかもしれない。

IV 老いてなお

60才を過ぎ、年々覇気がなくなる自分に気づいた。

64才の時、香港で働いていた長男を呼び戻した。

4年後、コロナ禍に見舞われ、会社は危機に直面する。

これまでの経験は役に立たない。なにしろ売上が無いのだから。

ここまでだ。68歳で長男に社長を譲り会長に退いた。長男は32才。

最悪の環境の中の継承だった。

若さはすごい。長男を先頭に若いスタッフが踏んばった。

危機を乗り越えた。

この間、私はいつさい口を出さなかった。いや、出せなかった。

年を取った。時代についていけない。

今、経営者人生は終わりを迎えようとしている。

そんな私にこの歌が刺さった。

梅が咲き鶯が鳴き人々は老いてなお田を耕しており

逸馬

もう、会社口を出さない、ということを決めている。

それは、とりもなおさず、田を耕さないということだろう。

『老いてなお田を耕しており』という幸せ。それがない。

20代、一日は短く、一年は長かった。

70代、一日は長く、一年は短くなった。

これからの10年か20年か、この身をどう処していくか。

一生を四季になぞらえて『青春 朱夏 白秋 玄冬』という。

70才は『玄冬』の始まり。

玄冬は暗く深く重い季節のように思う

体力も知力も衰え、気力さえ失われる

孤独の中に生きることが玄冬ではないか。

そんな恐れが私の中にはある。

それもの前を向いて歩を進めなければいけない

老いてなお、玄冬を生きる覚悟が必要だ。結果はどうあれ

咲くことを夢見て：

玄冬を生きる要諦は「持つこと」から「与えること」へ変わること。

譲る 地位役割を次の世代に託す

育てる 後進や子ども孫を見守る

味わう 身近な自然や家族との時間を大切に

学ぶ 好奇心を失わない

残す 経験や教訓を言葉や文章にして伝える

咲くことを夢見て泥の中にあり ついに咲かざる一生もある

逸馬



2026年8月16日